

# せわやがトカラ情報

十島村教育委員会  
〒892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号  
TEL 099-227-9771

南北160km 「心をつなぎ気概に満ちた」十島の教育

## 8月・・・アメリカからの「AIR MAIL」 十島村教育長 有村 孝一

十島村では、毎年夏に「見聞を広め、国際感覚を培い、自立心を向上させるため」に5人の児童生徒をアメリカ合衆国に留学生として派遣しています。今年も4人の中学生と1人の高校生をワシントン州とカリフォルニア州に派遣しました。これは、ホームステイ期間中に届いたある留学生からの手紙です。

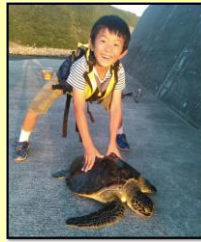
「このたび、ホームステイ事業により貴重な経験をさせていただきありがとうございました。シアトル行きの飛行機に乗る前に、小宝島に住んでいる生徒と同じホームステイ先になるということを知り、とても驚きましたが、ホームステイに対しての不安が少し和らぎました。現地に到着し、ホストファミリーが Welcome Board を持って温かく迎えてくれて、とてもうれしかったです。平日はスタディーセンターで、日本の学生達と英語のゲームをしたり、スーパーや警察署といった町の施設の見学をしたりしています。週末は、ホストファミリーがシアトルの名所や近くの湖、動物園など、アメリカのことを少しでも多く知ってもらおうといろいろな所へ連れて行ってくれます。そして、ホストマザーの作るご飯がおいしくて、日本に帰りたくないと思ってしまうました。

私は、英語が本当に苦手で、最初の頃は、相手の質問も理解することができませんでした。しかし、ホストファミリーが私のために一生懸命伝えようとしてくれるので、少しずつ相手の話を理解できて会話が増えてきました。アメリカと日本の文化は、やはり違うということが現地に来てみると実感できました。戸惑うこともありましたが、現地の生活も少しずつ慣れてきて、とても楽しい時間を送っています。学生の時に、日本とは違う文化に触れることができ、本当に貴重な経験となっています。このような素晴らしい経験をさせていただき、本当にありがとうございます。」出発するときの不安が、あるハプニングで少し解消されたこと、ホストファミリーの思いやりに触れてうれしかったこと、苦労しながらもコミュニケーションがとれるようになったこと、文化の違いを肌で感じたこと、この経験は貴重だと実感したことなどが率直に綴られていました。他にも、同じような感動の手紙が届きました。報告会でも、一人一人があるがままのアメリカの文化に触れた感動を、熱く

語ってくれました。留学生の手紙を読んだり、報告を聴いたりして、「この5人は、短期間の経験から多くのことを学んで帰ってきてくれたんだな。」と感心することでした。まもなく、この5人の生徒達から、24日間のホームステイ研修をまとめたものが届きます。今後は、この経験を十島村の他の子どもたちに還元していただきたいと思います。十島村から未来に羽ばたく国際人が誕生していくのが楽しみです。

## 夢 シリーズ 南日本新聞に投稿 「ウミガメにあえた！」 諏訪之瀬島小学校1年 沖園 豪陽

おもたいぞ。サメがつれたとおもいました。ぼくのさおがグググッと、おれそなぐらい大きくまがりました。「つるぞ!」。ひだり手でぎゅっとなぎつて、みぎ手でほんきでリールをグルグルとまきました。ちゃいろの大きなまるとウミガメが、かおをだしました。「ウミガメがきた。」おとうさんを大きなこえでよびました。うみからかおをだしたウミガメは「あーっ」と口をあけてないていました。ウミガメがあばれて、ぼくとのつなひきははじまりました。はりをとってあげようと、おとうさんにさおをわたして、くるまにいそいでたもとりにいきました。なんどもちょうせんして、ていぼうのうえにあげることができました。はりは、ほっぺたにひっかかっていた。いたそうだったから、とってあげました。ウミガメのせなかののってしゃしんとってから、うみににがしてあげました。だいじょうぶかなと心配しました。ぼくもりゅうぐうじょうによんでもらえるかなとおもいました。



## 輝 十島村海外派遣留学生帰国!

今年も十島村から5人の生徒がアメリカ合衆国西海岸へ派遣されました。24日間のホームステイ研修です。7月26日に役場で出発式を終えた5人は、少しの不安と大きな期待を胸に、27日に成田空港からサンフランシスコ空港へと出発しました。今年、2つの州の3つの町に分かれての研修でした。カルフォルニア州サンタローザに諏訪之瀬島中学校の秋庭くん、ワシントン州アーリントンに諏訪之瀬島中学校の山木く

んと口之島中学校の永吉さん。ワシントン州メアリーズビルに小宝島中学校の清水くんと山海留学生だった岐阜県立大垣西高校の早川さん。8月22日は、台風の影響で2人が19日のフェリーで帰島したので、TV会議を使っ



ての報告会となりました。5人とも、少し日焼けした笑顔で、ホームステイ研修の成果を発表してくれました。ホストファミリーの優しさに一気に不安が吹き飛んだことや家族のように接してくれたことへの感謝、文化の違いを学べたことや友だちができたこと、中にはホストマザーの生き方に感動を覚えたことなど、24日間がいかに充実した日々だったかが伝わってきて、聴く方も感銘を受けました。「人間的にもっと成長し、英語力もつけて、またホストファミリーに会いに行きたい。」と述べた1人の留学生の眼差しは、すでに次のステップを見据えているようでした。

## 灯 シリーズ—島で暮らす 「修学旅行で学んだこと」 宝島小学校5年 寺田 碧海

「いってらっしゃい。気を付けて。」島民の方々に見送られながら、いよいよ修学旅行が始まりました。最初は、はじめて会う5・6年生ばかりだったのでみんなちようしていましたが、慣れて友だちになることができました。自主研修では、ガイドさんが史跡を案内してくださいました。鹿児島島の歴史を知ることができて勉強になりました。また、自分たちで道順や時間を考えて、科学館や博物館に行きました。市電に乗るときは、近くにいた方が電車の乗り方を教えてくださいました。安心して乗ることができました。昼食は、お好み焼きを自分たちで作って食べました。少し形がくずれてしまいましたが、特別おいしく感じました。白熊は大きくてびっくりしました。高千穂牧場やまほろばの里では、アイスクリーム作りや動物とのふれあい、絵付け体験など、初めての体験がたくさんできたのでよかったです。また、霧島神宮でおみくじを引いたり、空港見学もしたりしました。ホテルでは、たくさんの友だちとレクリエーションをしたり、一緒にご飯を食べたりして、楽しく過ごせました。驚いたのは、私たちの早い出発のために、ホテルの方々が朝2時半から朝食の準備をしてくださったことです。心から感謝したいです。私は、この修学旅行を通して、たくさんの方々に支えられているということと交流の楽しさを実感しました。これからも、感謝の気持ちを忘れず、周りの



人と仲良く過ごしたいです。そのためにも、自分のことだけでなく、他の人のことも考えたり、決まりを守ったりしたいです。

最後に、私は、これからの目標を立てました。それは、大勢の人の中でもはずかしながら発表することや初めて会った人にも自分から話しかけることです。楽しくていろいろなことが学べた修学旅行でした。

## 十島村の小・中学校からのメッセージ 諏訪之瀬島小学校 教諭 右田耕大

フェリーとしまの作る波しぶきが夜光虫を青白く揺らめかせ、最後の秘境と呼ばれるトカラ列島へとやってきた。たった5人の吹奏楽団が校歌を演奏してくれた。同僚に島を案内してもらい、勢いよく煙を吐き出す御岳の姿、南限となる桜の大木、のんびりと過ごす牧場の牛たち、島の様々なものを見て回り、感動した。

この諏訪之瀬島に来て1年半が過ぎた。島の方々と出会い、様々な体験をして今思うことが3つある。まずは、自然の驚異と恵みだ。来島してすぐに嵐のような雷雨に見舞われた。吹き荒れる雨風の中、家が震えるほどの雷鳴が響く。翌日の朝には、すっきりとした青空が表れ、竹林が何事もなかったかのように風に揺れる。トビウオの時期になると、島中が昨晩のトビウオの量と大物を仕留めた話題となる。夜釣りに出ると満天の星空に吸い込まれそうになる。この雄大な自然と向かい合おうと、自分がいかに小さな存在かに気付くことができる。

2つ目は、寛容で温かな島民だ。道端で会うときの笑顔。魚が捕れるとおすそ分けが大量にやってくる。飲み会に呼ばれると、まるで家族のように扱ってくれる。魚釣りをすると、仕掛けの作り方から釣れる場所まで手取り足取り教えてくれる。自然の厳しい環境の中で助け合い、受け入れ合って生きてきた優しさがにじみ出ている。

3つ目は、純朴な子どもたちだ。中学生と小学生が共にはしゃぎながら昼休みを過ごしている。遠くから朝の挨拶をこちらが振り返るまで何度も繰り返す。泥にまみれて汗を流し、ボランティア活動を頑張る姿。この自然とこの島民の中で育つとこんなにも素直な心が育つのだと感激する。

## 「教職員仲間であるあなた」への 私からのメッセージ

島で生活していると、生きた教師が無数に存在する。私自身の教えられることなど砂粒ほどもないのだと思う。その中でも、数年後、数十年後、子どもたちがふと少年時代のことを思い出せるような言葉を残してみたい。